

1998 年度
草薙ゼミナール 卒業論文集

1999 年 3 月

大阪経済大学 経営学部
経営情報学科

担当教員：草薙 信照

1998 年度 草薙ゼミナール 卒業論文集
【総目次】

指導教員 草薙 信照 1998 年度卒業論文集の刊行に寄せて

地域分析に関する研究

- 955133 岡 高志 国道 2 号線沿線における飲食店の立地条件と経営戦略
- 955167 譽田 賢一 Web 対応 GIS の設計と構築
- 955172 白川 貴之 和歌山市において J リーグチームを成立させるための要因
- 955177 鈴木 孝昌 京阪神における身体障害者に対する福祉水準
- 955194 辻本 英孝 近畿圏における人口推移と交通事故の関連についての考察
- 955230 松井 智紀 近畿圏における人口重心の移動に関する研究
- 975953 北橋 拓馬 名古屋圏における人口重心の移動に関する研究

インターネットの社会的意義

- 955014 井上 ゆかり インターネットで変化する就職活動
- 955165 小濱 徹也 インターネットにおけるメディアと広告の関係
- 955238 宮崎 和也 バーチャルコミュニティに関する考察
～ コンピュータが創る新しい社会～
- 955323 南部 真一 エレクトロニックコマースについての考察

情報化社会を見つめ直す

- 955142 香川 哲男 「西暦 2000 年問題」の動向に関する考察
- 955158 清原 学 情報化社会における個人情報のセキュリティ
- 955187 竹田 隆二 PC の入力装置に関する考察
- 955192 田ノ岡 博史 NEC PC の性能と価格についての考察
- 955334 平尾 哲也 21 世紀のデジタル放送に関する考察
- 955337 藤川 武史 音楽ビジネスにおけるメディアの役割
- 955347 的場 文朗 一般家庭におけるコンピュータ利用の意義
- 955354 八原 勇人 家庭内におけるコンピュータの役割に関する考察

「1998 年度卒業論文集の刊行に寄せて」

1999 年 1 月
指導教員 草薙 信照

1999年3月(1998年度)に卒業する諸君は、草薙ゼミの輝ける第1期生である。

1997年4月に着任したばかりの私は、演習テーマとして「PCによる地域分析システムの研究」を掲げてゼミを開講した。そのような新米のゼミを選んでいただいた諸君には感謝している。しかしその一方で、実際に集まっていたいただいた諸君には失礼であるが、“PCを使いこなす”レベルとはほど遠い実力の持ち主が多かったことに、愕然としたのも事実である。

それでも3年生の前期には、なんとかE-Mailの使い方やWebページの作り方をひととおり教え込むことができた。その結果、ゼミ運営にインターネットを積極的に取り込むための足がかりを得たのである。現在でも、草薙ゼミにおける研究成果は、いつでも経大ホームページを通して公開されているし、ゼミ生諸君はいつでも自分でアップデートすることができる。このような基本的な体制ができたのも、ゼミ生諸君の協力があってこそである。心残りには、Excelによるデータ分析やシステム開発まで、踏み込んで指導することができなかったことである。

卒業論文の総評であるが、ご覧になっていただければわかるように、演習の統一テーマ「PCによる地域分析システムの研究」からは想像もできなかったような多様な研究が行われた。その成果の方も、堅実なテーマで着実に成果を上げたもの、ユニークな着眼で私をうならせたものから、意欲は見られるものの途中で力尽きたと思われるものまで様々である。これらを個々に評価しようとするれば、それぞれについて言いたい事は山ほどあるが、ここは研究者本人である学生諸君らに、自己評価していただくと思う。

これは思いやりのようであって、実はかなり残酷な仕打ちであるかもしれない。手抜きでやってしまった者にはそれだけの力(能力・気力)しかなかったということであるし、満足できる成果を出せた者には大いなる充実感が残るであろう... 結局のところ、突き詰めれば個人の主観的な満足感がどこにあるかということであり、私が「合否」を評価する以前の問題として、各自が自己採点を行っているはずであり、「後悔」という点をつけるべきか「満足」という点をつけるべきかは、自分自身が一番良くわかっているでしょう? と言っているのである。

卒業論文の意義として、私がもっとも重要だと思うことは、1つのテーマについて(たとえ1ヶ月でしかなかったとしても)これほど真剣に取り組んだことはおそらく初めての経験であろう、という点である。研究内容どころかテーマさえも決められずに悩んだ日々、ワープロを前にしてもまったく文章が進まずあせった時間、「なんでこんなことをせなあかんねん」と投げやりになったこともあるだろう。しかし後になって思い起こせば、これが何物にも代え難い思い出になるとともに、社会に出てからも貴重な経験として生かされるであろうということが、私自身の経験としてわかっているからである。

そういったことから、諸君が一生懸命になって取り組んだという姿勢がひしひしと伝わってくる場合には、たとえその論文が1ヶ月でお手軽に仕上げたものであっても、あるいは全体の半分以上が文献からの引用であったとしても構わないと、私は考えている。

最後になるが、社会に出て行く諸君の健闘を期待するとともに、今後は同じ社会人として対等に、あるいは逆に私に物事を教えてくれるようなつきあいをしていけるならば、これに勝る幸せはないと思う。